東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007 年 12 月 14 日

犠牲祭

親愛なるムスリムの皆様。犠牲を捧げるというイバーダは、クルアーンにおいてそれ自体がしもべとしての行為であると説かれているものです。崇高なるアッラーはクルアーンで、「われは凡てウンマの（供犠の）儀式を定めた。かれが授けられる４つ足の家畜の上に、アッラーの御名を唱えなさい。」（巡礼章第３４節）「さあ、あなたの主に礼拝し、犠牲を捧げなさい。」（潤沢章第２節）と命じられました。預言者ムハンマドもまた、「人間は、犠牲祭の日にアッラーの為に犠牲を屠ること以上に、好ましいことを行なうことはない」とおっしゃられました。

犠牲を屠るとは、イバーダとして、定められた時期に、一定の条件に適っている動物を定められた形式でアッラーのご満悦の為に屠ることを意味します。知性があり、成年に達しており、旅行者ではなく、また宗教上豊かであると定義されるムスリムは全て、アッラーに近づき、そのご満悦を得る為にこの行為を行なう責任を負っています。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。人は犠牲を捧げるという行為において、イブラーヒームさまのように、アッラーとその命令への結びつきと、必要となればアッラーのご満悦のためにはあらゆる自己犠牲を行なう用意があることを示すことになります。だから全てのイバーダにおいてそうであるように、この行為においても良い意志とイフラースがまず必要となります。

親愛なるムスリムの皆様。犠牲とされる動物は、それをうまく行なうことができる人によって屠られるべきです。屠殺される場所まで連れて来る時にも、それらを苦しめてはいけません。そして左向きに寝かせ、足を縛ります。キブラへと向かせ、すぐにドゥアーを行い、「ビスミッラーヒ　アッラーフ　アクバル」と唱えながら、鋭いナイフで屠ります。

羊、山羊、牛、水牛、そしてらくだは、宗教上犠牲として屠られることが認められています。これらの性別は問われることは在りません。羊や山羊は一人分、牛や水牛は七人までが共同の動物として屠ることが出来ます。羊や山羊は１歳以上、牛などは２歳以上であれば屠ることが出来ます。

犠牲を捧げる日は、イードの礼拝の後という条件の下、イードの最初の三日間となります。アラファの日、あるいはイードの三日目よりも後には、犠牲を屠ることは出来ません。屠られた動物の持ち主は、その肉を、自分や家族、客で消費することも出来ますが、その一部を貧者に、またその一部を親戚等に与えることも出来ます。自分自身が必要としていなければ、全てを貧者に与えることも可能です。動物を屠ることは、代理の人に行なわせることも可能です。ただしそのお金をサダカとするだけでは、その責を果たしたことにはなりません。

皆様が捧げられる犠牲が、アッラーへと近づく為の媒介となりますように。